

過疎-高齢化地域における伝統漁撈 南三陸江島ア ワビ鉤漁の社会心理学的研究-

著者	大江 篤志
号	187
発行年	2001
URL	http://hdl.handle.net/10097/14372

おお え あつ し 大 江 篤 志

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 187 号
学位授与年月日 平成14年 3 月 7 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学位論文題目 過疎－高齢化地域における伝統漁撈
——南三陸江島アワビ鉤漁の社会心理学的研究——

論文審査委員 (主査)
教授 大 橋 英 寿 教授 畑 山 俊 輝
教授 嶋 陸奥彦

論文内容の要旨

本論文は宮城県南三陸沖の小漁村、女川町江島で筆者が継続的に実施してきた調査研究の結果を取りまとめたモノグラフであり、伝統的なアワビ鉤漁が過疎－高齢化のなかでいかなる変化をとげてきたかを社会心理学の立場から多面的にアプローチしたものである。

概括すると、第1章は本研究の課題と方法を、第2～3章は江島の過疎－高齢化を、第4～9章はアワビ鉤漁とその変化を主テーマとしている。以下に各章の要点を述べる。

第1章「江島アワビ鉤漁への社会心理学的アプローチ」は本研究の課題と方法の提示部である。

はじめに、筆者が本格的に調査に着手した1972年から、漁場での参与観察に1つの区切りをつけた1997年までの江島の様子を、出漁風景を織り込みながら点描し、アワビ鉤漁の骨格を解説する。これをふまえてアワビ鉤漁の特徴的な側面として伝統性、協同的組織性、地域的重要性、および技能性の4点を仮説的に提示する。

第2節ではアワビ漁業研究の前提となる本邦産アワビの種類と分布、各種漁法を整理したうえで、本邦アワビ漁業へのアワビ鉤漁の位置づけをおこなう。アワビ採取というアマ(海女、海士)の潜水漁法がイメージされやすいし、実際に多くの研究がこれにむけてなされている。しかしアワビ鉤漁は宮城県のごく一般的な漁法であるだけでなく、アマ漁業とならぶ代表的な漁法であることを指摘しておく。次に水産学、水産経済学、漁村社会学、漁業地理学、民俗学などアワビ漁業を対象としている主要な学問分野における研究動向を概観し、本研究が準拠す

る社会心理学、パーソナリティー体系と社会、文化体系の三者の統一的把握を追求する社会心理学的アプローチについてふれる。

第3節は課題の編成と方法論の検討にあてられている。本論文ではアワビ鉤漁と過疎－高齢化の双方を視野に入れ、全体を5つの課題にまとめた。次に本研究全体にかかわる視点と方法論、データ収集の方法に論及し、最後にこれまでの調査経過を個々の調査活動に即して整理しておく。

第2章「江島の過疎－高齢化と遠洋漁家の挙家離村」では、過疎－高齢化の進行経過を跡づけ、これに人口・世帯の流出経路を重ね合わせる。そうしたとき戦後の江島に最初にあらわれた過疎化への一大契機として浮かびあがってくるのが遠洋漁家の挙家離村である。

一般に離島は生活の利便性が低く、それ自体が島民の他出の潜在的条件となりやすい。第1節と第2節では江島の地理と生活を、主要施設、生活基盤整備の経過、江島列島海域の漁場・漁獲生物、気象・海象などの自然条件、島民の日常的行動圏、漁業組織・契約講・親類関係など生活組織に即して記述する。江島は宮城県沖の小離島にあり、立地条件からして在来島民のほとんどが沿岸・沖合・遠洋漁業で生計を立ててきた純漁村である。生活物資の大半を地域外部に依存している。水道、光熱、道路など生活基盤が整備されたのは1965（昭和40）年以降である。島民の行動圏は江島とその周辺海域を中心にして、生活機能の補完の必要性から女川－石巻圏におよび、最近では仙台圏にまで拡大している。大正期に運行した女川－江島間の定期船の利便性は時代とともに向上したが、交通上の制約は依然として大きく、他地域への日常的通勤通学はいまだに実現していない。

第3節の目的は過疎－高齢化をもたらした直接の要因である人口・世帯の流出の経路を明らかにすることにある。1950（昭和25）年以降の人口と世帯数、高齢化率の推移の分析によると、(a)過密期（1950～1960年）、(b)人口減少期（1960～1970年）、(c)人口・世帯減少期（1970～1985年）、(d)過疎－高齢期（1985年以降）の4段階を経て過疎－高齢化したと考えられる。男女別年齢構成の推移と漁家世帯員の移動の分析から、遠洋漁船員の他出と挙家離村、および中学卒業時の進路選択にともなう他出の2つが人口と世帯の主たる流出経路となっていたことが明らかにされる。これを踏まえて第4節では遠洋漁家世帯の挙家離村の背景構造と、離村への押し出し条件を解明する。江島は幕末期以来、沿岸の漁船漁業、採貝藻漁業とカツオ一本釣りなどの沖合漁業の組み合わせで年間の漁業暦が成り立っていた。1965年前後から遠洋カツオ一本釣り漁業が周年操業体制に移行するにおよび、乗組員の漁業暦から沿岸漁業が削除され、遠洋漁船乗り組みと沿岸漁業とに専門化し、二極分離する。当時は沿岸漁船漁業が不振であり、沿岸漁業従事青年層の多くが隆盛期のカツオ船に移動している。専門化した遠洋漁家にとり、江島は生業の場としての意味をもたなくなるとともに、留守家族の生活や子どもの教育には不便な生活地となり、女川、石巻方面への挙家離村が相次ぐ。青年乗り組み層も結婚を契機に転出していき、一部沿岸漁家は後継者不在の状態に陥る。

江島では高校進学による青年層の恒常的な他出もまた過疎－高齢化の大きな推進要因となっていた。

第3章「中学生の進路選択の変化と漁業後継者の流出」は中学生の進路選択の変化を取り上げている。第1節では中学生の進路選択を、成人期へといたる青年期社会化水路の選択として

とらえ、中学生・青年層と保護者・成人層の社会化の世代間相互作用の視点から、本章で分析する5つの作業課題を提出する。

第2節の課題は決定進路の動向分析をとおして進路の変化を明らかにすることにある。分析用具として三叉路、学業継続・就業、地域残留・離脱、地域構造準拠・非準拠の4つの進路類型を構成し、1955～1993年度卒業生676人の進路を分析した。その結果、(a)1955～1974年にかけて低進学地域であった江島は、その後一挙に高進学地域に変貌したこと、(b)この過程は昭和30年代、40年代、50年以降の3段階を経て進行したが、男子と女子の経過は同じではなかったことが明らかになる。女子は昭和30年代の離脱－地域構造非準拠－就職・就業型から40年代の離脱－非準拠－就職・進学型を経て、50年代の離脱－進学・学業継続型へと変化したのに対し、男子では昭和30～40年代の残留－地域構造準拠－就職・家業型から50年代の離脱－進学・学業継続型へと直接変化している。高校進学化に着目すれば江島の過疎化は昭和50年以降に本格化したことになる。しかし女子では昭和30年代においてすでに離脱型水路が一般的であったことから、男子よりも早期に過疎化の進行役を演じていたといえる。地域構造へのリクルート機能を担っていたのは昭和40年代までの男子であったことになるのであるが、残留型の主流は遠洋漁船乗り組みになっていた。地域漁業が二極分離していたこの年代においてすでに、アワビ鉤漁を含む沿岸漁業へのリクルート機能は失調しつつあった。これがその後に過疎－高齢化となって顕在化してくる。

第3節では昭和40年代以降の進路態度を、予測－理想・期待－逆理想・逆期待の水準で分析する。昭和50年代になると理想－期待進路が進学型に収斂し、他はすべて逆理想－逆期待進路となる。こうした態度の転換は昭和50年ころに生じたとみられる。第4節では漁業継承にたいする中学生の態度と保護者の期待を分析している。昭和55年以降になると中学生は継承には消極的、否定的となる。保護者の側でも継承期待が消失するとともに離村展望が具体化、現実化していく。中学生の進学型水路は、保護者の老人期離脱型の展望形成と表裏の関係で一般化したのである。

第5節は進学型水路への準備体制の問題を扱っており、中学生の行動空間の変質を、家事家業手伝いへの要求程度、生活時間の配分、および学業達成度の3つを指標にして分析する。進路選択の変化を進学型水路への準備体制と親和的態度の形成としてみると、昭和40年代の中学生は55年以降の中学生よりも日常的に家事家業手伝いに組み込まれており、総じて自宅学習時間は短い。この傾向はとくに昭和40年代の男子に顕著であり、進学型水路選択を保証するような準備体制の形成の場が限定的であったといえる。中学生の学業達成度は年代的に上昇していることから、中学生の適応空間は、昭和40年代の家事家業型・学校型の複合的行動空間から、学校型－進学水路型の単一的構造の空間へと変質したと考えられる。これは中学生・青年層の進路選択にたいする保護者・成人層の態度の変化の結果でもあり、将来の生活地展望の変化をとまなうことになる。

第6節は中学生－保護者の進路選択以後の将来展望の変化を、生活地へのみとおしを軸にして分析している。これによると将来の生活地として保護者を含む成人層、中学生ともに石巻圏を高く評価するようになっている。また最終的な生活地への展望も石巻型が主流を占めるようになり、江島は将来の生活地としての地位を喪失するようになる。

二極分離後の沿岸漁業は、青年期社会化水路選択の歴史的変化とともに、人的リクルート源を失うことになる。現在のアワビ鉤漁はこの延長線上におかれているのである。

第4章「江島漁業におけるアワビ鉤漁の位置と構造」では地域的重要性と組織性の双方の側面からアワビ鉤漁をみている。第1節においては沿岸漁業における主要漁種、漁家の漁業従事類型、および宮城県下のアワビ生産地域の3つのレベルでの比較をとおして、重要漁種としてのアワビ鉤漁の変遷を跡づける。ここから江島はもともとが採貝藻漁業中心の漁村としての性格を強くもち、アワビ鉤漁は伝統的に重要漁種としての地位にあっただけでなく、宮城県下でも有数のアワビへの高依存地域であったことを指摘する。

第2節ではアワビ生産に関連する活動の総体をアワビ生産システムとし、これを構成する活動群の概要を示す。近代的技術による海中造林と人工稚貝増養殖事業はアワビ鉤漁とは別系統のアワビ生産活動であるが、アワビ鉤漁の不振が引き金となって導入されたものであり、アワビ鉤漁の地域的重要性の反映と解釈できる。しかし近代化したのはアワビ生産だけではなかった。近代的装備による組織的外部密漁による被害は一般漁場のみならず稚貝放流の管理漁場にまで広がっている。漁業者に与えた経済的、心理的影響は大きく、アワビ稚貝中間育成業者のモラルの低下をひき起こしたと推定される。順調に生産量をのばした増養殖・放流事業は、漁業者の高齢化、相次ぐ密漁被害により停止状態になる。

第3節の課題は組織性という観点からアワビ鉤漁を構成する単位活動を抽出し、その機能と相互の関連について検討することにある。アワビ鉤漁とは狭義には一般漁場におけるアワビ採取活動であるが、広義にはアワビの生産－販売活動の全体的システムであり、(a)組合総会における年間計画の決定、(b)入札による月間計画の確定、(c)開口の決定、(d)漁場への出漁、(e)沖検査、(f)選別、(g)計量と伝票の作成、(h)出荷、(i)仕切り伝票の精算という、それぞれに独自の機能を有する9つの単位活動から構成される組織的活動の総体としてとらえられる。次いでこれらの単位活動の役割構成と活動内容、関連する外部環境の特定をおこない、以下の各章への展開をはかる。

第5章「入札と出荷」は販売部門として一括される7つの単位活動を取り上げ、これらの役割構成と活動内容を中心に記述している。本章ではこれら7つの単位活動を機能に応じて2つに分けている。第1節では年間実施計画の確定と出荷ルートの確保に焦点をあわせ、年間事業計画、入札のための月間採取計画の立案、および買受人と落札価格の決定に関連する条件を分析する。年間計画は組合執行部が前年度実績にもとづいて立案し、組合総会で承認可決されることにより確定する。江島漁協は基本的に県漁連依託型の出荷形態をとっており、組合産業部が月間の採取数量と開口回数を計画し入札会にのぞむ。11月期の月間計画案は前年度同期の実績、12月期は当該年度11月期実績にもとづいて立てられる。アワビの販売単価は市場出荷量、供給量の月間変動、品質などの条件によって左右されるが、なかでも宮城県に先立って入札会が実施される本邦有数のアワビ生産地である岩手県の落札状況の影響が大きいといえる。第2節の記述対象は沖検査、選別、計量と伝票作成、集荷と出荷、および代金の授受などの出荷販売ルートにアワビをのせるための手続きにかかわる活動である。過疎－高齢化により組織構成員が高齢化しているものの、販売部門は流通業者との契約関係で活動する組織体であるため、その構成と活動内容そのものに大きな変化はないと考えられる。

第6章「各船の舟内構成の変化」では、生産部門の基本単位である各船の乗組員が、後継者不在のもとでどのように変化したか、それにたいしてどのように対応してきたかを詳細に追尾

する。第1節と第2節では、伝統的な各船内部の役割の配置と活動構成、漁場で展開される採取－操船のダイナミクス、および伝統的な役割移行サイクルの記述をとおして、アワビ鉤漁の伝統的継承を可能にさせてきたものが青年層の新規参加、およびヘコダイ（副操船役割）→トモヌリ（副採取役割）→ナカヌリ（主採取役割）→トモヌリ（副採取役割）→カジマオシ（主操船役割）というきわめて単純な役割移行システムであったことを指摘する。

これをうけて第3節で過疎－高齢化による伝統的役割移行システムの失調過程を取り上げる。各船乗組員の変化の分析から、(a)乗組員総数の減少、(b)女子乗組員の増加、(c)乗組員の高齢化、(d)1隻あたり乗組員の減少、(e)2人乗りの増加と乗組員配置の縮小、および(f)出漁隻数の減少が指摘される。これにもとづいてさらに乗組員数、性、年齢、乗組員の離脱と新規参加の契機、結合関係、役割移行、各船の解体のそれぞれについて分析したところ、リクルート源の変化、素人化、役割移行ルート短縮、同一役割への固着、役割の飛び越しと逆行、家族化と少数化などの変化が浮かびあがる。

現在のアワビ鉤漁は伝統的な舟内役割を再規定することによって維持されていると考えられるのであるが、もう少し一般的に言えば、青年層のリクルートが絶たれた後に成人期化した老人層によって、つまりは老人期の意味を変質させることによって命脈をたもってきたといえよう。

第7章「漁撈具」では漁撈具をとおしてアワビ鉤漁の変化を検討する。第1節では漁場での移動と操船用の、第2節ではアワビの発見と採取のための漁撈具の使途、形状と仕組み、製作と補修、ならびに近年にあらわれた変化を取り上げる。これらの変化のなかで過疎－高齢化との関係で生じたものとして、操船面では小型スクリューの浸透、アワビの発見と採取では老眼鏡の使用があげられる。前者はカジマオシの高齢化と女性化による推進力の低下を、後者はナカヌリの視力の低下を補うためにアワビ鉤漁にあらたに組み込まれたものであり、過疎－高齢化による操船－採取能力の低下への対応策となっている。

第8章「開口」の課題は、開口を生産部門である出漁を作動させる活動システムとしてとらえ、そのメカニズムと過疎－高齢化による変化を、協同的組織性と技能性の側面から明らかにすることにある。

第1節では開口の形態と実施回数の変化の経過を概括的に跡づける。第2節は開口判断が準拠している原則の解明に照準をさだめる。このために開口予告と最終判断の2つの関門に関連する社会・経済的条件と自然・生態学的条件を枚挙していき、これらの条件相互の関係を検討する。その結果、開口は共同性、生産性、安全性の3つの原則に準拠して判断されているとの結論に達した。過疎－高齢化との関係からすると各船の操船－採取能力の低下によって安全性原則が強化されるようになると仮説的に考えることができる。

第3節では開口決定の最終段階におこなわれる安全性判断のための技能がいかなるものであるかを明らかにしようとしている。安全性判断の対象となるのは波や風などの自然条件であるが、アワビ採取場面は岩礁域となるため、とりわけ波浪強度の判断には細心の注意がはられる。最初に開口日と非開口日の波高を気象庁測定の観測値を用いて比較してみる。この結果、開口は有意に波高の低い日となっていることが示される。次に面接法により漁業者に開口日波高を想起してもらった結果、実際の開口日波高と面接調査結果には大きなズレが見い出され

た。検討の結果、調査の方法に問題があるとの結論に達した。漁業者は岩場域の波しぶきへの注目という非常にシンプルな方法で、波の物理的強度を判断していたのであり、これを波高という指標で表現する方法をもっていなかったのである。ここで漁業者の波浪判断の方法に即した研究方法の開発がもとめられることになる。

そこで波浪映像を用いた刺激尺度を作成し、これを用いて漁業者・非漁業者を被験者とする実験的研究をおこなった。第4節はこれの報告である。実験の結果、漁業者は低リスクの波浪状態を基準にして開口判断にあたっているとの結論をえた。この点を確認するため漁撈体験を欠く非漁業者を被験者とする実験をおこなった。ここから非漁業者は漁業者とは異なった判断をしていることが明らかになる。漁業者は漁場への出漁経験をとおして波浪判断のための認知的枠組を形成していると考えられる。

最後に第5節で過疎－高齢化時態において波浪判断がどのように変化したかをみる。過疎－高齢化により安全性原則が強化されるとの仮説に反して、過疎－高齢期においては以前よりも中リスク、高リスク状態での開口が多くなっていることが明らかになった。この理由について検討した結果、共同性原則の強化が推定された。

漁場への出漁はアワビ生産の実施部門となる単位活動であり、アワビ採取のための技能性をもっともよくあらわれる活動である。第9章「出漁」の課題は各船が漁場で駆使する技能と、過疎－高齢化による変化を明らかにすることにある。

参与観察と聞き取りの結果の検討から、多量のアワビの採取を旨とする各船の出漁活動は、漁場の選択と漁場間移動、漁場内での探索移動コースの判断、および的確な鉤引採取の3種の活動からなると考えられた。

第1節においては漁場選択を取り上げ、漁場間の移動がいつ、どのようなときにおこるか、またそれはどのような条件との関係でおこなわれるかを分析的に記述する。漁場の選択には気象、海象などの自然的条件、アワビ棲息量の見込みにかかわる海底の生態学的条件、他船の動きからえられる個々の漁場への漁獲圧の付加程度に関する情報が判断材料となっており、各船の漁場レパートリーの枠内でこれらが総合的に判断されるとみられる。

第2節では選択した漁場内でのアワビ発見のための探索移動が、移動コースのプランニング、アワビの探索、発見と確認の活動から構成されていることをまず指摘し、次いでそれぞれを規定している条件を明らかにしている。漁場内移動のプランとコース選択にも漁場選択と同様の条件が関与しているが、未明早朝から出漁するので、ヒノマワリ（太陽の運行）は発見効率を左右する大きな条件となっている。アワビの発見には海底面からのアワビの弁別と大小の確認の2つの側面があり、採取者が漁場海底についてもっている認知図との照合が重要な役割を果たしている。そしてこれらの活動全体は海中照度によって影響されるとみられるので、最後に海中の明るさとアワビの発見、および移動コースの選択の関係を乗船観察の結果にもとづいて検討する。

発見したアワビの鉤引採取はごく短時間に終了するが、採取のためのプランニング、採取位置の調整、タケツギ、鉤引剥離、タケタグリ、取り込みの6つの活動からなる一連の過程であり、第3節ではそれぞれの活動のポイントとその阻害条件を検討し、鉤引採取の技能を明らかにしていく。

第4節では探索移動コース、鉤引採取動作、および採取量の変化をとおして、過疎－高齢化

時態における出漁活動の特徴を検討する。アワビ鉤漁の過疎－高齢化は乗組員の少数化、女性化、高齢化としてとらえることができるが、これによって出漁活動がどのように変化したかを分析する。事例数が限られているなどの制約条件はあるが、加齢にともなう(a)探索移動コースの深場から浅場への変更、(b)鉤引採取動作の遅延、および(c)採取量の低下が確認された。以上の点は、乗組員の高齢化により採取活動全体におとろえが生ずることを意味している。しかし本節で分析対象としたナカヌリの多くは高齢化してもなお標準以上の水揚げをしていた。このことは発見－採取能力が低下しても、漁場の移動判断や漁場内での探索移動にかかわる諸技能によって、採取量の低下がカバーされている可能性があることを示唆している。

「おわりに」では本研究の作業枠組としたアワビ鉤漁の4つの側面、伝統性・協同的組織性・地域的重要性・技能性にそって全体をふりかえり、残された調査研究上の課題を整理する。最後に方法論上の課題として、モノグラフ的研究の限界をこえるためのエクステンシブな比較研究への展開、および社会化の世代間相互作用の理論化の2点を指摘する。

論文審査結果の要旨

戦後の社会変動の過程で本邦沿岸漁村はドラスティックな変化をこうむっている。本論文は、宮城県の小漁村、女川町江島をフィールドに過疎－高齢化事態における伝統的なアワビ鉤漁の変容を、漁業者の社会化の視点から多面的にアプローチした社会心理学的モノグラフ研究である。論文は9章から構成される。第1章は課題と方法の検討、第2～3章は対象地域の過疎－高齢化過程の分析、第4～9章がアワビ鉤漁の変化の分析に当てられている。

第1章では、水産学・水産経済学・漁村社会学・漁業地理学・民俗学などアワビ漁業をめぐる主要学問分野における研究動向を概観し、そこに社会心理学的アプローチを位置づけるとともに、江島アワビ鉤漁のもつ伝統性・協同的組織性・地域的重要性・技能性の4点を作業仮説にして研究課題群を整理し、それへの接近枠組と方法論的視点、データ収集の方法が論述されている。

第2章では、江島の過疎－高齢化を分析し、人口・世帯の主たる流出経路として遠洋漁船員の他出と挙家離村、および中学卒業時の進路選択にともなう他出の2つを指摘する。遠洋漁家世帯の挙家離村は1960年代に始まる本邦遠洋漁業の周年操業化にともなう遠洋漁船乗り組みと、沿岸漁業への地域的二極分離のもとで、遠洋漁船員が家族生活の利便性、次世代の結婚、教育問題などを契機に他出していったことを実態的に跡づける。

第3章は、中学生の進路選択を、成人期へといたる青年期社会化水路の選択としてとらえ、中学生・青年層と保護者・成人層の社会化の世代間相互作用の視点から、高校進学化と過疎－高齢化の関係を長期間の進路調査結果にもとづいて分析する。1964～74年にかけて低進学地域であった江島は、1955年前後・1965年前後・1975年以降の3段階を経て高進学地域に変貌したとし、この過程を進路態度、家業継承への態度と期待、進学型水路への準備体制と学業成績、進路選択後の将来展望の諸側面につき細密に分析し、中学生の進学型水路の地域的一般化が、中学生の側の家業継承への消極的・否定的態度の浸透、保護者の側での継承期待の喪失と老人期の地域離脱型の展望形成と表裏の関係で進行したと結論づける。

第4章では、地域的重要性と組織性に焦点づけてアワビ鉤漁の位置と構成を記述する。江島は伝統的にアワビ鉤漁を重要漁種としてきただけでなく、宮城県下でも有数のアワビへの高依存地域であった。こうしたアワビ鉤漁を構成する単位活動を抽出し、その機能と相互の関連について検討し、アワビ鉤漁とは狭義には一般漁場におけるアワビ採取活動であるが、広義にはそれぞれに独自の機能を有する9つの単位活動から構成される生産－販売活動の総体としてとらえる。

第5章以下においては、これらの単位活動にそくして過疎－高齢化事態におけるアワビ鉤漁の変容を記述分析する。

第5章は、販売部門として一括される7つの単位活動の変化を取り上げている。そして組織構成員が老齢化しているものの、販売部門が流通業者との契約関係で活動する組織体であり、その構成と活動内容そのものに大きな変化はないことが示される。

第6章は、生産部門の基本単位である出漁各船の乗組員の後継者不在のもとでの変化とそれへの対応を役割移行の視点から追尾する。はじめに、アワビ鉤漁の伝統的継承を可能にさせてきたものが青年層の新規参加と、きわめて単純な舟内の役割移行システムであったことを示し、この移行システムの失調過程を分析する。その結果、乗組員総数の減少・女子乗組員の増加・乗組員の高齢化・出漁隻数の減少に対し、リクルート源の変化・素人化・役割移行ルート短縮・同一役割への固着・役割の飛び越しと逆行などにより対応してきたことを明らかにし、青年層のリクルートを絶たれて後、伝統的な舟内役割を再規定し老人期の意味を変質させることによって命脈を保ってきたと結論する。

第7章では、漁撈具の変化を取り上げ、過疎－高齢化による操船と採取能力の低下への対応策としての小型スクリューと老眼鏡の浸透を指摘する。

第8章は、生産部門の出漁を作動させる活動システムである「開口」のメカニズムと過疎－高齢化によるその変化を分析する。開口判断に関連する社会・経済的、自然・生態学的条件相互の関係の検討から、共同性、生産性、安全性の3つの原則を抽出し、各船の操船と採取能力の低下により安全性原則が強化されるようになると仮説する。次に、安全性判断の主要対象である波浪強度を漁業者は岩場域の波しぶきへの注目という非常にシンプルな方法で判断していることを明らかにした。波浪映像刺激尺度を作成し、漁業者・非漁業者を被験者とする実験的研究をおこなった結果、漁業者は低リスクの波浪状態を基準にして開口判断にあたっていること、非漁業者は漁業者とは異なった判断をしていることを指摘し、漁業者は漁場への出漁経験をとおして波浪判断のための認知的枠組を形成していると結論する。最後に、過疎－高齢化事態における波浪判断の変化を分析し、安全性原則が強化されるとの仮説に反して、過疎－高齢化以前よりも中リスク、高リスク状態での開口が多くなっていることを明らかにし、共同性原則の強化が背後にあることを示唆する。

第9章は、アワビ生産の実施部門となる出漁行動の変化の分析に当てられている。参与観察と聞き取りの結果の検討から、出漁活動は漁場の選択と漁場間移動、漁場内での探索移動コースの判断、鉤引採取の3種の活動からなるとし、これらの活動の構成と規定条件を明らかにする。次いで探索移動コース、鉤引採取動作、採取量の変化をとおして、過疎－高齢化事態における出漁活動の特徴を分析する。事例数が限られているなどの制約条件はあるが、加齢にともなう探索移動コースの深場から浅場への変更、鉤引採取動作の遅延、および採取量の低下を確認する。以上の点は、乗組員の高齢化により採取活動全体に衰えが生ずることを意味しているが、

より詳細な検討の結果、発見－採取能力が一定程度低下しても、漁場の移動判断や漁場内での探索移動にかかわる諸技能によって、採取量の低下がカバーされている可能性があること、アワビ鉤漁が高齢化した漁業者の技能によっても維持されていることを示唆する。

最終章では、研究全体の知見が整理され、モノグラフ的研究の限界を超えるためのエクステンシブな比較研究への展開、老年期におけるアイデンティティ形成と社会化、および世代間相互作用を軸とする社会化の理論化があらたな課題として提出される。

本論文は、江島という特定漁村における伝統漁撈の変容をテーマとしているが、それが地域の伝統的社会化システムの解体と再編の過程で、老年期社会化の再規定と変質をともしつつ進行したとの理論的主張は、長期にわたる研究成果に裏打ちされている。また現今の高齢化した社会状況における人びとのライフサイクルの変化の問題に通底しており、モノグラフを超えた一般性と説得性を有している。関連する多方面の学問分野の研究知見を踏まえた学際的な研究枠組みと多彩緻密で独自の研究方法からえられたデータがフィールドワークとしてのすぐれた水準を支えており高く評価される。また地域の伝統漁撈をとおして地域社会の変化をとらえたことは、社会心理学的地域研究の一つの方法を提示するとともに、他の関連諸学との会合点となるであろう。論者は、独自の方法論に立ち、多様な調査法を創案駆使して伝統漁撈の変化を社会心理学的に解明することに成功しており、その成果は社会化研究の裾野を広げてこの分野の今後の展開に大きく寄与するものであると評価できる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。